

なので、今の日々があるのはカツアゲおかげといえなくもないらしい、と知る。

「ちよつと傷見せてみる」

帝人の顎を指で持ち上げ、まじまじと彼の顔を見る。腫れの具合はそこまでひどくもない。二、三日でおさまるだろう。けれど殴られた拍子に唇が切れたらしく、それがまた痛々しい。

「唇、切れたのか」

「少し。でも大丈夫です。舐めれば直る程度ですよ」

このとき、帝人は冗談のつもりで言っただろう。けれど、このとき静雄は半ば混乱状態の興奮状態で、つまり正常ではなかった。

（そうか、舐めれば直んのか）

言われた言葉を素直に受け止め、そのまま顔を傾ける。そうして、ぺろ、と彼の口端へと舌をのぼした。

「……っ、ちよ、……静雄さんっ」

ぎよつとして帝人が叫ぶように名を呼び、慌てて離れる。その反応で少し、正気に戻った。……本当に、少しだけ。

「舐めれば直るって言っただろ」

「言いましたけどあれは言葉の綾って言うか……っ」

顔を真っ赤にして帝人はわたわたとしつつ静雄の舌が触れたあたりに掌をおく。いかにも初な反応で、たいそう可愛かった。

「っていうか直るにしても普通舐めないですよ？」

未だ、帝人の顔は赤い。

「そうか？」

「そうです。ほとんどキスみたいなものじゃないですか」  
確かに、舐めるのとキスするのではあまり変わらないかもしれない。触れるのが舌か唇かの違いだけだ。

（そっか。あんまり変わらねえんだな）

ならば、ついだからキスもしておくか、と思う。大差ないなら、別に構わないのではなからうか。ただ少し、触れるだけなのだから。

思うと同時に、勝手に体が動いていた。再び顔を傾け、自分の唇を彼の唇に重ねる。一瞬で離れたが、少し惜しい気がした。もう少しくらい、触れたままでも良かったかもしれない。

「な、な、なななっ……」

ぱくぱくと帝人は口を開閉させるが、言葉にはならない。赤い顔をますます真っ赤に染めあげていく。

「ななななに、何するんですかっ！」

告げる帝人は半泣き状態だ。混乱しています、と顔に書いてある。

そして問われて、初めて静雄も自分が何をしたのか理解した。

「……キスだな」

つい、体がうっかり勝手に動いてしまった。しかも後悔していない自分がいる。

「そうですよキスですよっ。僕、初めてだったのに！」

「そうか、初めてか」